

25. 伝統工芸

名張には、昔から使われてきた生活用具を人の手で作り上げる技が今も引きつがれています。それらの技で作られる製品は伝統工芸品として保護され、今でも大切にされています。

1. 組紐

組紐は明治時代の中ごろに、伊賀市の廣澤徳三郎という人が東京で修業した後、伊賀にその技を持ち帰りました。1906（明治39）年ころには、組子（組紐を作る人）が20名あまりもいました。着物を着るときにつける「帯じめ」を作っていました。最近では着物を着る人が以前に比べて少なくなってきたこともあって、生産量は少なくなっています。神社などから依頼を受けてお祭りなどで使う特別の「ひも」を作ることもあります。名張では、かつては組紐を作る工場が10軒以上もありましたが、今では2軒になってしまいました。そのうちの1軒は新田にある「伊賀まちかど博物館 中内組紐工房 堤側庵ギャラリー」として作品の紹介をしています。



組紐でつくられたベルト、ネクタイ

組紐は、工房によってそれぞれ独自の模様をつくりだしており、その模様は限られた人以外には伝えられません。近年では、これまで続けてきた「帯じめ」作りの技術を大切にしながら、新たにベルトやネクタイなどの商品開発を進め、その範囲を広げようとしています。また、日本国内だけではなく海外にも発信しています。



後をつぐ人が減ってきています。
伝統工芸を残していくために、わたしたちにできることはないか考えてみましょう。



地域の方から学ぶ「組紐」

美旗小学校では、4年生が、地域の方から組紐について教えてもらっています。大切に受けつがれてきた伝統の技を学ぶよい機会となっています。

2. 火縄

火縄作りは江戸時代、美旗の新田に鉄砲隊が組織され、鉄砲に使う火縄を小波田で作るようになったのが始まりとされています。

現在では、京都市東山区にある八坂神社で、おみそかから元日にかけて行われている「をけら詣り」に、上小波田で生産されている火縄が使われています。青竹で作る火縄は、全国でただ一つ



火縄を作る保存会の人たち

とされています。竹でできた火縄は火持ちがよく、薬品を加えなくても、水をかけない限り火が消えることはありません。かつては火縄を作る人が多く



火縄に火をつける様子



八坂神社

なくなっていました。そこで、伝統の灯を消してはならないという思いから、地域の有志が立ち上がり、伝統の技を覚えてもらうことになりました。それまで一人で火縄を守ってきた人は、「地域の有志の人たちが後をついで取り組んでくれることになったのでうれしい。知っていることはすべて伝えたい。」と話しました。その思いを受け、今でも活動は続いています。

3. 伊賀焼

伊賀地方で焼かれる焼き物を伊賀焼といい、1300年ごろに始まりました。それは、伊賀地方一帯に焼き物に向けた良質の粘土があったからです。高温で焼くと窯の中で自然に青色のガラスのようなものが現れて、独特の美しい焼き物になります。

茶の湯が盛んだった時期には茶器として武士に好まれました。18世紀中ごろの江戸時代には藤堂藩の支えんがあり、椀、皿、鍋などの日常使われる焼き物が作られました。

以前には、名張にもたくさんの伊賀焼を作る窯元がありました。今では数軒の窯元が残っています。そのひとつで箕曲中村にある「龍芳窯」は、伊賀まちかど博物館になっていて、茶わんや花びんなどの多くの作品が展示されています。また大きな窯や焼くときに使う燃料の赤松の木なども見ることができます。



伊賀焼



赤松の木